

主 題：私たちの誇りは神

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章18-23節

Iコリント3：18から見ていきます。3：18-23を読みます。

「18 だれも自分を欺いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思ふ者がいたら、知者になるためには愚かになりなさい。19 なぜなら、この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕らえる。」20 また、次のようにも書いてあります。

「主は、知者の論議を無益だと知っておられる。」21 ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。22 パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです。23 そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」

このパウロのメッセージの中に、私たちは三つの命令を見ます。あたかも、パウロがコリントの兄弟たちに対して信仰的に「目を醒ましなさい」と語っているようです。というのも、パウロはすでに、この世の知恵が人間の目にどんなにすばらしく映っても、神の目にはそうではないこと、この世の知恵の虚しさを教えて来ました。まさに、1：18～2：16まで、そのことを教え続けて来たのです。ですから、もうすでに教えたコリント教会の者たちに対して「あなたがたはいつまで神を知らないこの世の人たちと同じように生きているのか？いい加減に目を醒ましなさい！」とパウロはここで語っているように見えるのです。今日、私たちはパウロがコリント教会に与えた三つの矯正を見ていきます。

☆コリント教会への三つの矯正

1. みこころに逆らうことを止めなさい 18 a 節

1) みこころに反することだから

18節の初めに「だれも自分を欺いてはいけません。」と記されています。どうしてこんな命令をパウロがしたのか？それは、コリント教会には自分を今の世の知者と思うことによって自分を欺いている人たちがいたからです。教会の中にはこの世の人々から「知者」、つまり、「賢い人」と認められることを願う者たちがいたのです。そういう評判を得たかった。皆からそのように見られたかった。この世の知恵において長けた者たちを尊敬して、自分自身もこの世の知恵を追求していたのです。そこに彼らは満足を見出そうとしていたのです。また、このような評価を人々から得ることが彼らにとっての喜びであり、彼らにとっての生き甲斐でもあったのです。

しかし、パウロはこれまで私たちに教えてくれたように、どんなに称賛される知者であっても、自分の知恵によって霊的なこと、神についての真理を知ることはできない、だから、愚かなのだと言います。たとえば、この世の知者に「永遠のいのちについてどうすればそれを得ることが出来ますか？」と問い掛けたとしたら、彼らは真理を伝えることはできません。もちろん、キリストを知っていれば別ですが…。また、「どうすれば本当の幸せを得ることが出来ますか？」と問い掛けたとしても、キリストを知らなければ彼らは答えることができません。なぜなら、彼ら自身もそれを得ていないからです。ですから、パウロは「私たちにとって最も大切なものを得る方法を教えることができない知恵にどれほどの価値があるのか。たとえ、人々がどんなに称賛したとしても、我々人間に最も必要なこと、どうすれば罪の赦しを得ることが出来るのか、どうすれば永遠のいのちを得ることが出来るのか、それを教えることのできない知恵とはどれ程のものなのか？」と言うのです。神の知恵こそが最も価値あるものだということをパウロは教えたのです。

さて、このようなことをすでに教えたにもかかわらず、このコリント教会のクリスチャンたちはまだこの虚しい知恵を追い求め続けていたのです。悲しいことです。こうしてパウロからそれがいかに虚しいのかを教えられていながらまだそれを追求しているのです。それは私たちも抱えている「弱さ」が原因なのです。たとえば、私たちも神のみこころを知ったときに、もし、それが自分のしたいことと違った場合どうしますか？これが神のみこころだと神のみことばから教えられたときに、それが自分のやりたいことと違ったときに、間違いなく、あるクリスチャンたちは自分のしたいことを喜んで捨てるでしょう。そして、みこころに従って行こうとしましょう。でも、ある人々は自分のしたいことをするためにみこころを捨てるという選択をするでしょう。それで、その選択をするためには「これをしても大丈夫だ」と自分を欺くことが必要になって来るのです。それが間違っていると分かっているにもかかわらず、それをするために「これをしても構わない」と自分を騙す必要があるのです。それがまさに、このコリント教会の中に起こっていたのです。この世の知者が神の前に虚しいと聞いても、自らに「大丈夫だ！」と

言い聞かせながら、自分自身を騙して自分のやりたいことをやり続けていく。そういう人がいたので。

しかも、この「欺く」ということばはある前置詞と「欺き」ということばが複合してできたことばです。その前置詞はギリシャ語の「エク (EK)」ですが、この前置詞が付いた場合「完全に、すっかり」という意味を持ちます。たとえば、この「エク」という前置詞が接頭語として付いている場合、その後「満たす」ということばが付くと、それは「完全に満たす」という意味になるのです。また、「試みる」が付いた場合は「徹底的に試みる」という意味になります。実は、ここで「欺く」の前に「エク」という前置詞が接頭語として付いているのです。「完全に欺いている人」が存在していたということです。しかも現在形で書かれていますから、実際にそういう人がいたことを言っているのです。そのような働きにおいてすでに成功してそうして自分を騙している人がいたのです。

もしかすると、そのような人たちは周りの人々に影響を与えていたかもしれません。「大丈夫、大丈夫！パウロはそんなことを言っているけれど、それはパウロだから…。大丈夫、やっても大丈夫！」と、そのようなことがこの教会の中で起こっていたことが私たちは見て取ることができます。ですから、パウロは神のみこころを知っていても自分の願望を優先しようとしていると指摘し「今直ぐそれを止めなさい」と彼らに語るのです。自分を欺いてはいけない、それはみこころに反することだから今すぐに止めなさいとパウロは言いました。

2) この世に属する知恵だから

同時に、あなたがたが求めている知恵は「この世に属する知恵」だ、そんなものを求めてどうするのか？とパウロは改めて言います。18節に「自分は今の世の知者だ」と書かれています。この「今の世」は「この世」とも訳すことができることばですが、この「世」は「時代、世代」という意味です。また、「神に逆らう世」という意味もあります。実際にこのことばが使われているところ、テトス2:12「私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」、明らかに、これは神に逆らう世の中のことです。神に逆らう世の中の欲を捨てなさいということ。また、ルカ16:8では「この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」と、この世の子らと光の子らを対比しています。この世の子らは光の子どもではない。つまり、救いに与っていない者たちのことです。またルカ20:34にも「イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、」とあります。これらの「この世の子ら」ということばを見ると、これは「神への敵対」を意味することばです。

ですから、パウロは神と敵対する世の中の人々の称賛を得たとしてもそれはどうなるのか？なぜ、そんなものを追求するのか？そんなものをどれ程あなたが追求し、人々があなたのことを「すばらしい知者だ、知恵のある人間だ」と称賛しても、それは神を喜ばせるものではないと言うのです。ですから、パウロは「そんな虚しいものを追求することは止めなさい」と、それがまず18節でパウロが教えることです。あなたがたは神のみこころに逆らうことを止めなさいと言います。

2. 世を愛することを止めなさい 18b-20節

18節の続きを直訳するなら「(もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思者がいたら、) 愚かになりなさい。それはその人が知者になるためです。」で、「愚かになりなさい」これが命令です。世の中の知恵を求めている人たちに対して「愚かになりなさい」と命じます。パウロがここで新改訳第二版の訳をそのまま使うなら「知者になるためには愚かになりなさい」と言ったのは、神からの評価だけを目標として生きていきなさいということ教えるためです。すでに学んで来たように、世の中の人々はクリスチャンたちのことを「愚か者」と言います。この世の中で知者だという人に対して神は愚か者と言うのです。そのことは私たちはもう見て来ました。なぜ、この世の人たちから見ると我々クリスチャン、神に喜んで従おうとしている者たちが「愚かな人」に見えるのか？世の中の人々はこの世の流れに従い、この世にあって楽しく生き、好きなことをして過ごしている。そのような人々から見ると、主の栄光のために生き、主に喜んでいただくことを最大の目標として生きている人を見ると「大変奇異な人たちだ、こんなに楽しめるのに彼らはこの人生と時間を無駄に過ごしている、可哀想な人たちだ」と思うでしょう。もっと楽しいことができるのに、もっと好きな生き方ができるのに…と。でも、私たちはたとえどのような評価を受けたとしても神からいただいた祝福を知っています。

信仰者の皆さん、あなたは本当に神によって救われたことを心から喜んでいますか？実は、パウロがこの後教えていくのはそのことなのです。私たちクリスチャンに与えられた祝福がどんなにすばらしいのか、世の中の人々がどんなに富を積もうと、どんなに強く願っても自分たちの力で絶対に得ることのできない祝福を神からいただいているのです。あなたはいろんなときに確かに神が生きてくださっている、生きてともにいてくださっていると、そのことを強く感じる、確信することは何度もあったで

しょう？決して一人ではない、神が支えてくださっている、神が必要を確かにくさっている、神は生きておられると、神のことを心から感謝している人たちにとって、この世の人たちがどんなに私たちが非難

しようと、嘲笑おうと、そんなことは全く耳にも入って来ません。なぜなら、私たちは彼らが知らない祝福を実際にいただいているからです。

皆さん、イエスが天の御国についてこんなことを話しておられます。マタイ 13 : 44 - 46 「:44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。:45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。:46 すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」、畑

に凄い宝があるのを見つけた人は、自分の持ち物全部を売り払ってそれを買おうとするし、すばらしい真珠を探している者は最高のものを見つけたら、自分のすべてを売ってでもそれを得ようとする、それほど価値があるからです。私たちがいただいたこの救いは私たちのすべてよりも価値がある、そんなものを神は私たちにくださったのでしょ。私たちの救いは自分の生活にイエスを加えたものではありません。私たちは自分のすべてを捨てて「神さま、あなたに従います」と決心したのです。なぜなら、この神は、この救いは、すべてのものよりも価値があるからです。イエスがこの話をなされたその意味がお分かりになるでしょう。

皆さん、それほど価値があるもの、それを見つけたら喜んですべてを捨てます。イエスが備えてくださった救いは私たちがどんなに努力をしても得ることのできない救いです。主イエス・キリストは完全に罪を赦してくださり、私たちを新しく生まれ変わらせてくださる、そのような宝を見つけたときに私たちはすべてを捨てて「主よ、あなたに従います」と言います。だから、私たちはこの救いによって最高の宝を最高の真珠を得たのです。パウロがあたかも言っていることは「だから、それにふさわしく生きていきなさい」です。この世の知恵を求め続けるのではなくて、神の知恵を追い求めることが大切だと。人々がどんなにあなたを嘲ろうと、どんなに愚かだと言おうと、主の栄光のために主に喜んでいただくことを最大の目標として生きていきなさいと。私たちが目指すのは人からの称賛ではなくて神からの称賛なのです。

以上学んだことが、再び 19 節から教えられています。「なぜなら、この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。」と、この世の知恵の愚かさ、虚しさをパウロは改めて教えます。「この世」と記されていることばは 18 節にも「今の世」と出て来ました。「世」は日本語では同じですが、全く違うギリシャ語が使われています。「この世」とは「人間が住む全世界のこと」ですが、特にここでは「神から離れ去った不敬虔な人々」という意味があります。この世は神の怒りとさばきの対象なのです。その意味で「この世」ということばを使っているのです。すでに私たちは I コリント 1 : 20 でこの世の知恵の愚かさについて学んで来ました。「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」と。ここにあるように、知者とか学者、議論家というのは、その当時、人々が知恵ある者と認めていた人たちです。その人たちに対して神が下された裁定、神の見解は「愚かだ」ということです。ですから、人間がどんなに称賛したとしても人間の知者は神の前では愚かで役に立たないのです。

そのような知恵を追い求め続けていたコリントの教会の人々に対して、パウロは旧約聖書のみことばを引用してこの真理を彼らに教えようとするのです。19 節に「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕える。」と書かれているのは、ヨブ記 5 : 13 の「神は知恵のある者を彼ら自身の悪知恵を使って捕らえる。彼らのずるいはかりごとにはくつがえされる。」からの引用です。ここでみことばが教えていることは明らかに、これは「狩り」のたとえを使って話しています。動物にどんなに知恵があっても獵師に捕まるといことです。そのことを使ってパウロはそれと同じように、多くの人々は神に対して近づくことなく悪賢く逃げ続けていると言うのです。「悪賢く」とは「巧みな、狡猾、ずる賢い」という意味です。彼らは決して神の所に帰ろうとしないのです。しかし、どんなに狡猾に逃れたとしても必ず最後には、神によって捕えられる、そして、さばきを受けるということです。

もう一つの引用は 20 節に「また、次のようにも書いてあります。「主は、知者の論議を無益だと知っておられる。」です。これは詩篇 94 : 11 からの引用でそこには「【主】は、人の思い計ることがいかにむなしいかを、知っておられる。」と書かれています。パウロはこの「知者の論議」、つまり、彼らの「思いや思想、論理的思考などそのすべてを知っている」と言うのです。そして、その上で彼らが空虚、無益であることを教えているのです。なぜなら、神は彼らが何を言うかではなく、どんな心を持っているのか、そのことを見ているからだと言います。この「無益」ということばは非常におもしろいことばです。このギリシャ語を訳した英語は「moron」で、余り口にしたくないのですが「まぬけ、バカであ

る、低能である」と人をけなすようなことばです。ですから、どんなに人間の知恵を用いて神から逃げおおせるとしても最後には捕まるし、どんなに人々に感銘を与えるような立派なことを口にしたとしても、神はそれぞれの心の思いをすべてご存じで、そして、そこには神のさばきがあるということを警告するのです。

皆さん、コリント教会のことをもう一度思い出してください。パウロはそこに1年半滞在しました。そして、しっかりとみことばを教えたではありませんか。ところが悲しいことに、教会には分裂が存在していたのです。その原因は皆さんお分かりになったでしょう。彼らが追求したのはみことばではなくてこの世の知恵だったのです。ジョン・マッカーサー先生はこのように言っています。「神のみことばが至高の権威として確立していないところでは分裂は避けられない。」と。だから、私たちに必要なことは、絶対的な権威を持っている神のことばに従うのです。ここに権威があるからです。人間ではない。絶対的な神のおことば、これに従うのです。でも、それに従わなければそこには必ず分裂が生じると言うのです。まさに、コリント教会がそのような教会だったのです。

そして、私たちの教会もそういう教会になり得るのです。みことばではなく人間の考えに立とうとしたらそうなります。結局のところ、こうして人間の知恵に立っている人たちの一番大きな問題は「プライド」です。マッカーサー先生は続けてこう言います。「プライドは常に人間の知恵、この世の知恵の中心であり、それは神の前に愚かである。すべてのことを知っていると思っている人を教えることは困難である。」と。想像つくでしょう？このコリント教会の中ではみなそれぞれそれぞれの知恵を自慢し合っている、また、教会の中で自分はだれに就くのかと、いろんなグループが存在します。そういう中で彼らを矯正しようとしても、多くの場合、彼らは聞く耳を持ちません。なぜなら、自分たちの考えが固まっているからです。箴言はこのように言っています。箴言13：10「高ぶりは、ただ争いを生じ、知恵は勧告を聞く者とともにある。」と、ソロモンは私たちの問題を的確に言っています。プライドというのがいかに私たちにとって恐ろしいものか。同じように箴言8：13にも「【主】を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」とあります。

信仰の成長というのは、私たちを高ぶらせるのではなくて、高ぶっていた私たちをへりくだらせていくのです。これまで自分が自分に対して持っていたプライド、それが自分が死ぬことによって削られていくのです。本当の自分を見た時に私たちには何も誇るものがないのです。パウロが言ったように「自分の弱さを誇ります」と、私たちも同じように「神さま、私は何も誇ることがありません。誇るのはただあなたしかありません。こんなどうしようもない者をこんなにも愛してくださり、あわれんでくださり…」と言います。

ですからパウロは、このコリント教会のクリスチャンたちに対して「この世を愛してはいけない。我々が愛するのは神であってこの神のみことばに従う者たちであるべきだ。人間の知恵を追い求め続けるのではなくて、神の知恵を求めなくてはいけない。」と言うのです。まさに、神が喜ばれるように生きようとしている人々、神のみこころに従っていきようとしている人々、その人たちは神を愛している人たちです。愛しているからそのように生きようとしているのです。パウロがこのコリント教会の兄弟たちに対して言ったことは「みこころに逆らうことを止めなさい。みこころに従いなさい。世を愛するのではなくて神を愛する者になりなさい。」でした。

3. 人間を誇ることを止めなさい 21-23節

21節「ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。」、これが三つ目の命令です。「誇ってはいけない」と言うのです。なぜなら、現実に、コリント教会は人間を誇っていたからです。22節「パウロであれ、アポロであれ、ケバであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです。」

1) パウロ、アポロ、ケバであれ

すでに、彼らの名前は1：12、3：4でも見て来ました。実際に、人々はこのような特定の人たちを誇っていたのです。「私はパウロが大好きだ、だれよりもパウロが好きだ。」「いや、私はケバ、つまり、ペテロが大好きだ。」と言ってこの人たちのことを誇っていたのです。繰り返しますが、それがこの教会の分裂の原因だった訳でしょう。彼らはそのリーダーたちを比べて自分の好みを設けることをしていたからです。「そういうことをしてはいけない」とパウロは言うのです。なぜなら、それを許すとまさにコリント教会のように〇〇派が教会の中に存在し始めるからです。

そこでパウロは「だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。」と言います。そのことは22節の後半にも書かれています。「すべてあなたがたのものです」と。なぜ、パウロはこういうことを言ったのか？パウロは自分自身もそうだしアポロもケバも「神のしもべ」だと言うのです。余談ですが、ケバ、すなわち、ペテロがコリントを訪問したという記録はありません。でも、いろんな形でペテロから影響を受けていたのだと思います。ですから、この人たちに対してパウロは「みな主に忠

実に仕えるしもべたちだ」と言ったのです。実際に、彼らはコリントの町に出て行って、パウロは種を蒔いたシアポロが水を注ぎましたが、実際に、彼らを派遣したのは神だと言っているのです。

確かに、彼らは神からそこに遣わされた忠実な働き人であり、彼らは神のみことばの真理を継続して語り続けました。ゆえに、彼らを深い尊敬をもって扱うことは必要だった、彼らの模範に倣うことは必要なことでした。でも、だからといって彼らの中に自分の好みを作って彼らを誇ってはならないとパウロはそのように言うのです。パウロがこのように人たちもすべてあなたがたのものだと言ったのは、今話したように、この人たちが神からコリントに遣わされていったその目的はコリント教会を建て上げるためだということです。そのために送られた神からの働き人だったのです。

そのことを考えた時に、このすばらしい教師たちを神が送ってくださった。だから、「誇るのなら、彼らではなく彼らを送った神を誇りなさい。この人たちは神の命令に従って主に仕えただけだ。称賛に値するのは彼らを送られ彼らを用いられた神だ。」と言うのです。神が与えられたものはこのすばらしい働き人だけではなかった。それ以外にもあり、そのリストが後に続いています。

2) 世界であれ

この世界、この宇宙のことです。それはあなたがたのものだと言うのです。なぜなら、これは神のもので、そして、あなたも私もこの神の救いに与ったなら、これは私たちのものです。ですから、私たちが救われる前も美しいものを見たとき感動しました。でも、感動を覚えて称賛したのは自然に対してでした。救われた私たちはその同じものを見た時に自然を称賛するのではなく、それを造られた神を称賛します。神はそれらのものをく다さってそれを楽しむことを許してくださっているからです。この世界はすべてあなたのものだ。そして、私たちはその先にもすばらしい約束を神からいただいています。そのことはこの後に出て来ます。この世界も実はあなたのもの、神が与えてくれたと言います。

2) いのちであれ

神は私たちにいのちをくださった。イエスがこのように言われました。ヨハネ 10 : 10 「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」と。

・霊的ないのち : イエス・キリストはこの世に来られ、私たち信じる者に「霊的ないのち」をくださった。そのいのちとは新しい歩みを始めていくいのちです。パウロがローマ書 6 : 4 で「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」と言っている通りです。新しい歩みをする者として私たちは生まれ変わったわけでしょう。それが救いです。新しい歩み、神を喜ばせる歩みです。神の栄光を現す生き方です。そのような歩みをする者として私たちは生まれ変わったのです。しかも、感謝なことに、私たちはその歩みをするにあたって、喜びをもって感謝を持ってその歩みをします。皆さん、そのように歩んでいるではないですか？神があなたを新しく生まれ変わらせてくださった、そのことを喜びながらそのことを感謝しながら、何とか主の栄光を現したいと思って歩んでいる、そういう新しい人生が始まったのです。

しかも、豊かな人生を約束してくださった。物があるうとなかろうと私たちは喜びをもって歩むことができるのです。主が私たちに約束されたのは必要を与えるということです。私たちはどんな時でも満ち足りる心を持って生きることができるのです。どんな時も喜びをもって感謝をもって歩むことができる、そのような歩みが可能だと教えてくださったのです。救われる前と救われた後とは全く違うのです。救いに与った私たちはこの全知の神がともにいてくださり、私たちのすべてのことを知ってくださっています。この方は全能であるゆえに、すべての必要を満たしてくださる。そんな新しい人生を私たちは歩き始めたのです。

・永遠のいのち : 当然、私たちはこの地上における生活だけでなく、この生活が終わった後も永遠のいのちを楽しむことができます。イエスは言われました。ヨハネ 10 : 28 「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」と。もう私たちはいただいたのです。私たちは永遠に神とともに生きるのです。そのような者にもうすでにされたのです。

3) 死であれ

「いのち」の後に「死」が出て来ます。「死」をも私たちに与えられたものだと言います。不思議なことです。でも、信仰者とはある面では死を待ち望んでいませんか？それは今の大変な生活からの逃避を願っているからではありません。パウロはピリピ 1 : 21-24 で「:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。:22 しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさって

います。:24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。」と述べています。なぜ、死ぬことが益なのか？それは私たちが救い主にお会いできるからです。私たちがこの罪のからだから完全に解放されることによって、神を悲しませることがなくなるからです。これは私たちに与えられた希望です。確実に死が近づいて来ています。昨日よりも今日と…。でも、イエス・キリストの救いに与る前だったら、死については話したくもないし考えたくもなかった。それはただ私たちが悩ませるだけだからです。でも、イエス・キリストの救いに与った私たちはこの死さえも喜ぶのです。なぜなら、今話したように、死とは神が約束されたすばらしい永遠の始まりだからです。敢えて、そのような言い方をしますが…。Ⅰコリント15:55、57には「:55 死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」…バラの茎の刺が全部抜かれていたら私たちは普通に触ることが出来ます。死はかつての私たちには刺のようなものであって、私たちが悩ませるものでした。でも、もうその刺が抜かれてしまったのです。「:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」と、私たちにあって死はもう恐れではないのです。私たちは死んでも生きるという確信を持って生きているのです。私たちにその先に永遠が待っているのです。神とともに永遠に生きるという確信です。

多くの人たちはそのような約束を与えるかもしれません。「あなたは死んでもその先に天国が待っているから」と…。問題は、いったい何を根拠にそのように言うのかです。彼らは私たちに問い掛けるかもしれません。「では、あなたたちの根拠は何か？」と。私たちの根拠はイエス・キリストです。あの十字架で死にそして三日後にその死から肉体をもって敢然とよみがえって来たイエス・キリストです。この方が保証です。この方がその死から敢然とよみがえって来られたゆえに、私たちもそのようになるのです。ですから、パウロが言うように、死でさえもあなたがたに与えられたものです。全く違う歩みが始まっているのです、皆さん。

4) 現在のものであれ

私たちが日々経験する様々なことです。そこにはいろんな試練もあるでしょう。苦しみも悲しみも、辛いこともいっぱいある。それもあなたがたのものだと言います。なぜかお分かりでしょう？すべて神があなたに特別に選んでくださっているからです。偶然に起こっていることはないのです。神が特別にあなたにそれを与えてくださっている。なぜなら、それがあなたに必要なだからです。何のために？そんなことを経験したくない、味わいたくないと思うかもしれない。でも、すべてをご存じである神は、最善しか為されない神は、あなたにそれを与えてそれによってあなたを訓練し、あなたが益々神を信頼し神を愛する者として成長するためにです。あなたがよりキリストに似た者に変えられるためには、そのようなすべてのことが必要であり、そのことを知っている神は敢えてそれらを与えるのです。そして、その中でもあなたがしっかり神を見上げて生きていくために必要な恵みを十分にあなたに備えてくれています。成長することは可能なのです。キリストの栄光を現すことは可能なのです。益々キリストに似た者へと変えられていくことは可能なのです。

あなたが今経験しているすべてのこと、実は、それも神があなたに与えてくださっていることです。もし、私たちが神の約束をみことばによって与えられる約束をしっかりと覚えているなら、私たちはそのすべてのことについても「なぜですか、神さま？」ではなくて「神さま、今は分からないけれど感謝します。あなたが言われたから、あなたが約束されたから…」と言うはずです。

5) 未来のものであれ

未来の祝福のことです。私たちはもう間もなくするとイエスにお会いします。イエスは私たちを迎えに来てくださる。死をもってイエスにお会いするか、生きたままイエスにお会いするか、そのどちらかです。お会いした後はどうするのか？私たちはイエスとともに地上に帰って来て、イエスとともに千年王国を治めて、そして、その後、神がすべてを新しくする新天新地が約束され、私たちは神とともに永遠を過ごすのです。

ですから、パウロは現在のものであれ未来のものであれ、すべてあなたのものだと言います。皆さん、神はすばらしい教師をこうしてコリントの教会に送られました。また、この世界にしても、いのちも死も、現在のもの未来のものもすべてのものはあなたのものだと言います。そして、このことは同じよ

うにあなたにも言えるのです。こうして神はあなたにすべてのものを約束してくださり、あなたに与えてくださった。しかも皆さん、このみことばを見た時に「すべてあなたがたのものです」と言って、あなたがたの中に区別はありません。この人にはこれだけ、この人にはこの中の三つだけとか、パウロはそんなことは言っていない。「すべてのものはすべての人に平等に与えられている」のです。これらの祝福を私たちクリスチャンは主から平等にいただいたのです。

だから、皆さんにも同じように与えられているのです。だから、パウロは言うのです。「それなのにどうしてあなたがたは分裂するのか？あなたがたはこれらすべての恵みが神から与えられているのになぜ人間を誇るのか？」と。この「人間を誇ること」が分裂を生んでいたからです。だから、パウロは「すべて神が与えたものでしょう。すべて神があなたのために備えてくれたものでしょう。だから、誇るの人間ではない。そのすべてを与えてくれた神を誇りなさい。」と言います。それがパウロのメッセージです。

そして最後に、23節「そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものであります。すべてのクリスチャンはキリストのもの、キリストに属する者だと言います。ということは、あなたには責任があるということです。

・あなたがたはキリストのものであり : Iコリント6:20「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。…」、神がイエス・キリストのいのちという代価をもってあなたを罪の中から滅びの中から買い取ってくださったのです。「ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と、みことばは救いに与ったあなたには救いに与った者としての責任があるということをお教えるのです。救いに与ったことがすべての終点であって、その後どう生きても構わないということではありません。救いに与ったならあなたには責任があるということです。それがみことばがお教えることです。教会にあって兄弟姉妹たちがいがみ合うこと、そのようなことのために私たちは救われたのではない。兄弟姉妹が愛し合うために私たちは救いに与ったのです。

コリントの教会のクリスチャンたちが心に刻むべき真理は何だったのか？それは、彼らはみなキリストに属する者であり、みなキリストの所有となったのだから、一人ひとりはこの主の栄光のために生きること、このお方に喜んでいただくことを最大の目標としてすべてのことを行う、それがこの救いに与った目的だということです。そのために私たちは生きているのだと言います。そのことを教えたパウロはこのように言っています。エペソ5:10「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」と。コリント教会の人々への教えと同じことが私たちにも言えます。私たちの責任とは、日々いろんなことが起こるけれどその中で何が神に喜ばれることなのかをしっかりと選択しなさい、それがあなたの責任だということです。また同時に、ピリピ1:20でも「それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」と、パウロが言うように、生きていようと死んでいようと、すべてのことを通して一つだけ私は願う。それはキリストのすばらしさが私を通して何とか明らかにされることだと。

私たちはそのように生きているのでしょうか？私たちは覚えなさいといけません。私たちは神の恵みによって救いに与った者としての責任があるのです。この神のすばらしさを世に証しするという責任です。今見て来たように、こんな祝福を神は私たちにくくださったのです。少なくとも、私たちクリスチャンはこの神にあって喜ぶことのできる者たちだと思いませんか？私たちは神から何をいただいたのか？そのことを見た時に「神さま、ありがとう！こんな祝福をくださって感謝します。」と言って、そのように生きるのが当然だと思いませんか、皆さん？

パウロが言っていることは、救いに与ったあなたには救ってくださった神に対して責任があるということです。この神がどんなにすばらしいお方であるかを現わすのがあなたの責任だと言います。生きていようと死を迎えようと、そのことだけを望んでパウロは生きたのです。なぜか？救われたことを喜んでいたのであります。神の祝福を心から感謝していたからです。

レオン・モーリスという神学者は「彼らの生活は自分が何者なのかを現わすべきである。クリスチャンの生活というのは、自分が何者なのかを現わすべきである。コリント人の自己主張はクリスチャンらしからぬものだ。彼らは本当はキリストに属しながら自らが自分自身の主人であるかのように振る舞っていた。」と言います。自分の好きなように生きていたのです。自分の人生の主人は自分であると。でも、「違う！」と、私たちの人生の主人は神です。自分が主人なら自分を喜ばせて生きればよい。でも、神が主人なら神を喜ばせるように生きるべきです。「あなたがたはキリストのものであり」と、この祝福をあなたがたはいただいた。あなたがたはキリストに属する者だ、あなたがたの所有者はキリストなのだと言っているのです。そして、その後、

・キリストは神のものであります : と続きます。このみことばを見て「イエスが神でなくなったのか？」と、パウロはそんなことを言っているのではありません。イエスは人としてこの世にお見えになったときも神でした。でも、イエスは同時に完全に人でした。そして、イエスが人としてこの地上を歩んだときのその歩みを私たちはみことばを通して教えられます。イエスが人としてこの地上を生きたときに何を為されたのか？父なる神のみこころに完全に従っていかれました。ヨハネ17:4「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」、父

なる神が「せよ」と言われたことをわたしはすべて成し遂げた。そのことによってわたしは父なる神の栄光を現したと言っているのです。人としてでした。つまり、イエスは人として父なる神のみこころに完全に従うことによって、父なる神がどんなにすばらしいお方であるかを明らかにされたのです。それこそが私たちに与えられた模範なのです。「主が生きたとあなたも生きなさい」と、そのように生きることができるのです。生まれ変わったからです。神の恵みが十分に与えられているからです。

信仰者の皆さん、私たちはしっかり覚えなければいけません。そのような役割のために神は私たちを救い、こうして私たちをこの国に置いてくださっているのです。イエスが私たちに示してくださったこと、「キリストは神のものだ」と、そして、キリストはそうのように歩んだのです。従順に歩んだのです。

パウロがこのメッセージを通してコリントの人々に何を教えようとしたのか？今、私たちが見て来た通りです。何度もその教えを聞いていながら、なかなかその実践を見ることのないこのコリント教会のクリスチャンたちに対して、「目を覚ませよ！いい加減に目を覚ましなさい！」と、あなたがたの歩みが神の前に喜ばれるのかどうか、それを考えないといけないと言います。ただやみくもに一日一日を過ごすのではない、無駄に過ごしてはいけない。みこころに従っているかどうか考えなさい。やりたいことをやろうとしているのか、それとも神のみこころに従おうとしているのか。この世を愛して生きているのか、神を愛して生きているのか、どちらですか？そして、あなたは人を誇るのかそれとも神を誇るのか、どちらですか？神が喜ばれるように生きなさいと、これがパウロが教えたことです。

主を愛する者として、主を誇る者として、あなたも私もイエスの模範に従って生きることです。そのときに神が喜んでくださる。感謝なことに、それを為すための助けを神はちゃんと備えてくださっています。助けをいただきながら、その働きをその歩みをするのです。

しっかりそのように歩んで、この一週間も主のすばらしさを証していきましょう。